慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	カレッジの教授課程と専門職養成の関係 : 1777–1828 年のイェールの事例を中心として
Sub Title	The relationship between courses of instruction and professional training at colleges: focusing on the case of Yale College, 1777–1826
Author	原, 圭寛(Hara, Yoshihiro)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2014
Jtitle	慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要 : 社会学心理学教育学 : 人間と社会の探究 (Studies in sociology, psychology and education : inquiries into humans and societies). No.78 (2014.) ,p.17- 29
JaLC DOI	
Abstract	This study examines the relationship between courses of instruction and professional training provided at colleges from the latter half of the eighteenth century to the early nineteenth century, with a particular focus on Yale College. In previous studies, education in American colleges during this period has been described as "civil education" or "education for leadership." According to these descriptions, the role of college education is to form students' minds and not merely to acquire knowledge for students to use after graduation. However, many American colleges, including Yale, were founded primarily as schools for instructing students in religious service. This objective was especially prominent at Yale during Thomas Clap's term as president. Therefore, what was the relationship between the courses of instruction offered at American colleges and later professional training? If the two were distinct, when did the separation begin to occur? This study offers answers to these questions by examining curricula changes at Yale between 1777 and 1828, when professional schools and their courses of instruction were first established. This study concludes that the courses of instruction at American colleges were not distinct from professional training until the mid-nineteenth century. In particular, existing courses of instruction in the college were changed to correspond with the foundation and objectives of the newly founded professional schools at Yale. This relationship was a consequence of the perceived connection between the cognitive effect of college instruction and the use of the knowledge acquired in college. Previous studies tend to overlook this aspect. Furthermore, this was adopted not only at Yale but also at Harvard and other American colleges in this era.
Notes	論文
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00069 57X-00000078-0017

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

カレッジの教授課程と専門職養成の関係

――1777–1828年のイェールの事例を中心として――

The Relationship between Courses of Instruction and Professional Training at Colleges:

Focusing on the Case of Yale College, 1777–1826

原　　圭　寛*

Hara, Yoshihiro

This study examines the relationship between courses of instruction and professional training provided at colleges from the latter half of the eighteenth century to the early nineteenth century, with a particular focus on Yale College.

In previous studies, education in American colleges during this period has been described as "civil education" or "education for leadership." According to these descriptions, the role of college education is to form students' minds and not merely to acquire knowledge for students to use after graduation. However, many American colleges, including Yale, were founded primarily as schools for instructing students in religious service. This objective was especially prominent at Yale during Thomas Clap's term as president. Therefore, what was the relationship between the courses of instruction offered at American colleges and later professional training? If the two were distinct, when did the separation begin to occur? This study offers answers to these questions by examining curricula changes at Yale between 1777 and 1828, when professional schools and their courses of instruction were first established.

This study concludes that the courses of instruction at American colleges were not distinct from professional training until the mid-nineteenth century. In particular, existing courses of instruction in the college were changed to correspond with the foundation and objectives of the newly founded professional schools at Yale. This relationship was a consequence of the perceived connection between the cognitive effect of college instruction and the use of the knowledge acquired in college. Previous studies tend to overlook this aspect. Furthermore, this was adopted not only at Yale but also at Harvard and other American colleges in this era.

Keywords: Yale College, Professional Training, Liberal Arts, Courses of Instruction
キーワード：イェール・カレッジ，専門職養成，リベラル・アーツ

* 慶應義塾大学大学院社会学研究科教育学専攻後期博士課程3年

はじめに

本稿は，イェールにおける神・法・医の各伝統的専門職[1]の養成課程設置の試みと，同時期のカレッジの教授課程（Course of Instruction）が，専門職養成の文脈とどのように関連してきたかを検討することで，カレッジと専門職養成の関係を明らかにすることを目的とする。本稿で扱う範囲としては，イェールにおいて最初に専門職養成課程の設置構想が出された1777年から，イェールに神・法・医の専門職養成課程が一通り整備される1826年までとする。

これまでの研究においてアメリカの南北戦争以前のカレッジは，基本的にはカレッジの目的をいわゆる「市民」，すなわち社会の構成員として相応しい人物や，その地域の指導者となるような人物の育成として捉え，そのために人格の形成，紳士的態度の養成，ないしは精神の諸力の拡張を目指してきたと解釈されてきた。ここでは植民地期以来，カレッジの理念はアンテベラム期を通して変化のないものとして考えられ，その代表的な例として，1828年のイェール報告が取り上げられてきた[2]。こうした傾向に対してガイガーは，アメリカ高等教育史の10の世代区分を提唱しており，南北戦争前後という枠組みにとらわれない歴史記述を目指している。ガイガーの区分に従えば，第一世代（1636–1740s）においては，カレッジは聖職者養成と密接に関わっていたとされるが，以降世代を追うごとに専門職養成との関係は薄れていったものとして描かれている。例えば第三世代（1776–1800）におけるカレッジでの法学教育の展開について，ガイガーは以下のように解釈している。

> 共和国的教育の観念――無視無欲［selflessness］，愛国心［patriotism］，新たな共和国における指導者および市民としての徳を染み込ませる。このような見解はテクストの選択，学生の弁論のトピック，広く謳われた（しかし成功しなかった）法学教育の導入に見られる[3]。

また，第四世代（1800–1820s）におけるリッチフィールド法学校の設立については，「市民教育[civil education]を意図したカレッジにおけるこれまでの法学の教授とは異なり，リッチフィールド法学校は専門職の実践に学生を準備させた」とまとめている[4]。

以上のいずれの先行研究においても，特に18世紀中葉以降のカレッジは，専門職養成とは切り離されたものとして描かれている。こうした傾向に対して近年のアンテベラム期のカレッジに関するモノグラフにおいては，植民地期から19世紀初頭に至るまでのカレッジ教育と専門職養成の関係について言及しているものもある。ニヴィソンによれば，ハーバード設立以来の聖職者養成のための古典語を中心とした課程は，リーダーシップの養成という観点から，法曹・医師養成への応用が可能なものであると考えられたために，19世紀初頭まで続いたとされている[5]。しかし植民地期のカレッジにおける聖職者養成は，リーダーシップの育成などといった精神的作用を期待すると同時に，聖職者としての実践のために利用可能な知識を習得させるという側面も含んでおり[6]，ニヴィソンをはじめ上記の先行研究においてはこの観点が欠落している。

またここでは植民地期以来のカレッジ課程の変化については語られておらず，カレッジ教育で獲得した知識のその後の利用という観点は用いられていない。しかし特にアメリカ建国直後の時期においては，各カレッジが相次いでカレッジ卒業生を対象とした専門職養成課程の設置を試みた時期でもあり，これに応じてカレッジ課程に様々な変更が加えられた時期でもあった。こうした試みの最初の例は，

1778年にイェールの学長に就いたエズラ・スタイルズ（Ezra Stiles：学長在位1778–95）が就任直前にイェール法人（Yale Corporation）宛に提出した「大学計画」（Plan of a University）であった。ここではボローニャ・パドヴァの両大学やスコットランドの3大学を例に挙げ，イェールにおいても同様の課程を設置すべきとの提言をまとめている[7)]。こうした例を踏まえると，18世紀中葉以降のカレッジも，専門職養成との関わりを，ニヴィソンの言うような「リーダーシップの養成」のような精神的作用のみならず，教授した知識の利用という点からも常に模索しており，その関係の中でカレッジの課程を定めていたのではなかろうか。このスタイルズの計画は，結果的にスタイルズの任期中には実現しなかったが，スタイルズの後継者であるティモシー・ドワイト（Timothy Dwight IV，学長在位1795–1817）やジェレミア・デイ（Jeremiah Day，学長在位1817–46）は，同計画にあるような医学・神学・法学の各課程の設立を果たした。以下本稿では，スタイルズによる「大学計画」の概要およびカレッジ課程の改革の概要を述べた上で，イェールにおける同計画実現の過程において，カレッジ教育の目的がどのように考えられていたのかについて，検討を行っていく[8)]。

検討にあたって本稿では，スタイルズの「大学計画」を起点として，イェールにおける神・法・医の各専門職養成学校の設立の経緯とそれぞれの課程を，ニュー・イングランド全体の専門職養成の展開を参照しつつ検討する。そのうえで，それぞれの専門職養成においてどのような教育が前提とされていたかを明らかにする。更にイェール・カレッジの課程とその変化を，専門職養成課程の設置と対応させながらたどることで，専門職養成とカレッジの関係を明らかにする。

1．イェールの初期の教授課程とスタイルズの「大学計画」

イェールはもともと，世俗化が進行したハーバードに対し，会衆派の聖職者養成を担う機関として設立された。設立は1701年であるが，1745年にトマス・クラップ（Thomas Clap，校長在位1740–45，学長在位1745–66）がコネティカット議会から恒久的認可状（Charter）を獲得し，制度的基盤が確立した[9)]。

トマス・クラップ学長期のイェールは，ラテン語，ギリシャ語，ヘブライ語といった古典語を中心として，論理学，形而上学，数学，物理学，修辞学，弁論，神学，美学といった科目から構成されており，クラップの場合，これに加えて日曜の説教の後に自らの講義の時間を設定していたが，そこでは砲術や航海術といった知識も披露しており，これらは当時広範な役割を担っていた聖職者が知っておくべき基礎知識として教授されていた。しかしクラップによる過度の宗教的統制はカレッジ学生の反発を招き，クラップは学長退陣を迫られ，以降学長空位の時代が続く。この時期にはクラップの宗教統制に対する反発から，ヘブライ語の選択科目化など，教授課程から宗教的な色合いが若干ではあるが薄れた時期であった。

クラップの後，学長空位の時代を経て学長に選出されたスタイルズは，学長就任に先立って，1777年にイェール法人に「大学計画」を提出した。同計画ではまず，イタリアやスコットランドの各大学を例に挙げた上で，イェールにおいて，以下のような教授陣の構成を提示した：学長及びチューター3名，神学教授，教会史教授（学長兼任），法学教授，医学教授，数学及び自然哲学教授，ヘブライ語及び東洋言語［Heb. & the Orient Languages］教授，市民史［Civil History］教授，弁論及び文法教授[10)]。

そのうえでスタイルズは，カレッジ卒業生向けに神・法・医の各課程を設置すべきとしており，特に医・法のそれぞれの課程について，どのような科目を設置すべきかについての提言を行っている。ここ

で提言されている科目は，医学に関しては解剖学，薬学と，現在で言うところの病理学に相当するものを各1年，計3年行うものであり，法学に関しては市民法や古代ローマ法，英国法とアメリカ13州の憲法などから成っていた[11)]。

このようにスタイルズは，1777年の時点でその後のイェールにおける神・法・医の各専門職養成課程の原型となるような案を出していたが，スタイルズの在任中には，財政難をはじめとする様々な理由から，この案は実現しなかった。そこでスタイルズは，カレッジに実務的な法学を導入するなど，当初の計画とは異なる形で，専門職業人の養成を実現させようとした。ここにおけるカレッジでの法学は，「大学計画」に示された法学のコースと類似するものであり，公法・市民法をはじめとした法律専門家の養成を意図していた[12)]。

またスタイルズは，モンテスキューの*Spirit of the Law*やバッテルの*The Law of Nations*，ペリーの*Principles of Moral and Political Philosophy*などといった法学関連の著作を暗唱用の教材としてイェールに導入し[13)]，カレッジにおいて法曹や法律専門家を養成するための基盤を同時に固めていった。

2.　イェール・カレッジと医師養成

2.1　イェール・カレッジにおける化学教授職の設置

スタイルズの後を継いで学長となったティモシー・ドワイトは，このスタイルズの「大学計画」の実現が学長就任時以来の大きな目標であった[14)]。ドワイトがこの実現のためにまず取り組んだのが医学校の設立であり，これに先立ってカレッジにおける化学の拡充を図った。

イェール法人は1798年に化学教授（Professor of Chemistry）職の設置を可決するが，ここで選ばれたのがベンジャミン・シリマン（Benjamin Silliman）であった。シリマンはイェールを卒業後，法学のキャリアに向けて勉学を続けており，化学に関しては全くの素人であった。しかしイェールの伝統を守るという観点から他のカレッジの卒業生を教授職に迎えることを嫌ったドワイトは，イェールの卒業生から，新しく化学を学ぶに足る才能を持ち合わせた人物として，シリマンを選んだとされている[15)]。

シリマンは化学を学ぶため，フィラデルフィアに滞在したが，ここでシリマンに化学の基礎を教えたのが，医学校のジェームズ・ウッド（James Wood）であった。以降シリマンは様々な人物から教えを受けることとなるが，その多くはやはり医学校に在籍していた人物であった[16)]。このように化学は，当時は基本的にカレッジではなく医師養成の課程に設置された科目であった。このことは，当時の化学はカレッジの科目としてではなく，医学の基礎として基本的に位置づけられていたことを示す。従ってドワイトも，医学教授職の設置は医学校設立のための布石として考えていたと解釈できよう[17)]。

2.2　イェール医学校とコネティカット医学会

ドワイトの医学校設立計画は，イェール法人は協力的であったものの，地元の医師の協力を仰ぐことも不可欠であった。コネティカットにおいては1784年に地元の医師による団体が結成され，1784年にコネティカット医学会（Connecticut Medical Society）として州から設立認可状を得た[18)]。そして同学会は1800年5月14日に，以下のような医師養成の基準を採決した[19)]。

> 昨年10月に任命された委員会により提出された，内科医および外科医の候補者が受けるべき教育について，以下のように定めた報告書が<u>採決</u>された：

内科医および外科医の候補者は，21歳に満たない場合は認められず，また優れた能力を有しなくてはならず，カレッジでの教育を受けておらねばならず，最低2年間，信頼できる内科医または外科医のもとで学ばなくてはならない；もしくは，このような予備教育を受けていない場合，最低3年間はこのような実践者のもとで学ばなくてはならず，以下の要件を満たさない限り資格を得ることはできない：

自然哲学，化学，植物学に関する一般的な知識，医薬品，薬学，解剖学，生理学の全般の知識，内科および外科の実践。

イェール医学校は，こうした規定を基に，カレッジ卒業後の徒弟制に当たるものとしてコネティカット医学会に認められ，設立された。設立に際しては，イェールが当時のコネティカットにおいて最先端の化学教授及び施設を有していたことも，大きな要因となったとされている[20]。

2.3　アメリカの医学教育史とイェールのケース

このように，アメリカにおいては19世紀初頭の時点ですでに，カレッジ教育を前提とした医師養成の規定が州レベルで成立していた。こうした規定を全米で初めて採用し，実際に運営を始めたのは，カレッジ・オブ・フィラデルフィアであった。

植民地期のアメリカにおいて，医師や法律家といった専門職は，徒弟制により養成されていた。これは13世紀から14世紀にかけて確立されたイギリスのギルドを再生産したものであり，イギリスの法の下に保護されていた。しかし独立戦争の開始とともに，こうしたギルドはイギリスとの関係を断ち切り，独自の組織を編成し始める[21]。

このような流れの中で，アメリカで初めて設立された医学校が，1765年開校のカレッジ・オブ・フィラデルフィアである。このカレッジは徒弟制の補助を目的として設立されたものであり，公立の大病院と提携し，学士号を持った学生に対して，徒弟制による教育を受けるための前段階の教育を施していた。このカレッジはその後ペンシルバニア・ユニバーシティとなるが，1800年の時点で実際に学生を有していた医学校はこのペンシルバニア・ユニバーシティ以外にはキングス・カレッジ医学校，ハーバード医学校，ダートマス医学校の3校だけであり，3校ともペンシルバニア・ユニバーシティと同様のスタイルをとっていた[22]。すなわちこの頃の医学教育は，カレッジの卒業を前提としていた。

イェール医学校（Medical Institution）も，これらの医学校と同様の入学要件を設定していたと考えられる。医学校の教授構成やコースの概要がイェール・カレッジのカタログに記載され始めるのは1825年からであるが，ここでは教授陣については，内科及び外科の理論および実践の教授，薬科学および植物学教授，化学および薬物学教授，解剖学および生理学教授より構成されていた。またカレッジにおける自然哲学・鉱物学・地質学の講義に参加することが可能であると定められているが，自然哲学に関しては，通常の授業料とは別に料金を支払う必要があった[23]。1826年のカタログでは，10月の最終週から2月の最終週までに，約50から100の講義が，上記の教授陣により行われるとの記載がある[24]。このように自然哲学のみ別料金を必要としたという点から考えると，医学校においては，例外はあるものの，基本的にはカレッジでの自然哲学の修得が前提とされていた。また，この当時の医学書は，印刷技術の発展により英語による翻訳書が出回り始めてはいるものの，未だラテン語で書かれていたものが主流であった[25]。従ってカレッジでのラテン語の修得も，医師養成のための重要な基盤となっていた。

3. イェール・カレッジと聖職者養成

3.1 イェールにおける聖職者養成

ドワイトは医師養成同様，聖職者養成に関しても，カレッジ卒業後の学生に対し教授を行う場を設定する構想を有していた。ドワイトがこうした場を必要とした理由としては，カレッジの課程が広範になるにつれて，専門職養成のための個別具体的な科目を教授しきれなくなった点を挙げている。そのうえで同時期に現れた法学校（Law School）を例に挙げ，これと同様の聖職者養成の機関の必要性を提唱した[26]。

しかしこれを担当する教授の人選が進まず，結局はドワイト自身がカレッジ卒業生向けの神学の教授を行うこととなる。ドワイトはイェールの学長となる前に神学者養成の経験があり，これと同様のものをイェールにおいても行うこととなった。学生はここで1–2年間，自身の才能とペースに応じて学び，聖職者となっていった。イェール図書館の豊富な蔵書や，ジェームズ・キングスリーをはじめとする他の神学系の教授との議論などから，イェールのカレッジ卒業生はここで充実した訓練を受けることができたとされている[27]。

ドワイトによるイェールでの聖職者養成は一定の成果を出していたものの，ドワイト自身はこの聖職者養成の水準には満足していなかった。ドワイトは聖職者も，医師・法曹と同等以上の規定が必要であると感じており，後のアンドーバー神学校（Andover Theological Seminary）の設立を積極的に支援した[28]。

3.2 アンドーバー神学校の設立とイェール神学校構想

アンドーバー神学校は，1808年に全米初のカレッジ卒業生を対象とした聖職者養成機関として誕生した。この背景のひとつとして，ハーバードが事実上ユニテリアンへと改宗したために，伝統的なカルヴァン主義の流れを汲むプロテスタント諸派の聖職者養成の基盤に危機感を募らせた聖職者たちが，会衆派独自の機関として設立したものである。ドワイトはこの施策に積極的に助言を行い，教授陣の構成や教授課程などの計画に対して大きな影響を与えた[29]。

この神学校は，フルタイムの3名の教授により3年間の神学コースを提供するように定められ，スタートした。この神学校はすべてのプロテスタントの聖職志望者に開かれていたが，入学するためにはカレッジを卒業し，よき才能と高いモラルを有していることが求められた[30]。

ドワイトはこの神学校の開学式典において説教を行っているが，ここでドワイトは，神学者養成の基礎として，古典語，市民史，教会史，論理学，修辞学等の重要性を強調しており，これらを聖職者養成の前提としてカレッジに求めていた。こうした前提の上で，ドワイトは神学校で行うべき科目として，自然神学（Natural Theology），キリスト教神学（Christian Theology），宗教文学（Sacred Literature），教会史（Ecclesiastical History），聖書台での弁論（Eloquence of the Desk）の5点を挙げている[31]。これらの科目は，弁論を除いては基本的に古典語で書かれたテクストの暗唱を中心に行われていたと考えられる。従ってこれらの科目は，カレッジにおいて教授される，特に古典語などの知識無しには修得が不能だったことは，想像に難くない。

ドワイトはこのように，アンドーバー神学校の設立に際して大きな影響力を有したが，イェールにおいても，アンドーバーと同水準の，会衆派の聖職者養成に特化した神学校の設立を目指していた。この

構想はドワイトの任期中には実現しなかったが，ドワイトの長男による寄付を基に，ジェレミア・デイ学長就任後の1822年にドワイトの名を冠した神学教授職（Dwight Professorship of Didactic Theology）が設置され，これがイェール神学校の基となった[32]。

神学校（The Theological Department）のコース等の記述がカタログに登場するのは，1826年からである。ここでは教授陣の構成として，ドワイト・プロフェッサーシップ神学教授を筆頭に，宗教文学教授と，カレッジ兼任の神学教授，修辞学教授から構成されていた。コースは3年間と規定されており，入学の条件としてカレッジでのリベラル・エデュケイションの修了が明記されている[33]。従ってイェール神学校もアンドーバー同様，カレッジ卒業生を対象としたものとなっており，また神学教授・修辞学教授がカレッジと兼任していたことから，神学校との連携を意識した授業がカレッジにおいて可能となっていたと考えられる。

4.　イェールにおける法学教育の展開

4.1　カレッジの教授課程としての法学と法学校の登場

イェールにおける法学教育は，先に述べた通りスタイルズの時代から，法曹及び法律専門家の育成を目的としたカレッジのレベルで拡充が試みられてきた。この方針はドワイトが学長となっても変更されなかった。ドワイトは1801年に法学教授職を設置するが，法学教授による授業はカレッジ在学生が対象であった。この教授職に最初に就いたのはエリズル・グッドリッヒ（Elizur Goodlich）であったが，彼は1810年に職を辞し，以降法学教授職は空席のままとなった[34]。従って，1810年以降は，カレッジでの実務的な法学教育は衰退していった。

ドワイトが1810年以降，法学教授職を空席のままにした理由としては，適任者が見つからなかったということもあろうが，それ以上に，コネティカットにおいて法律事務所付属の法学校が設置され始めたことも，理由の一つであったと推測される。最初の法学校とされているのは，コネティカットに1784年に設立されたリッチフィールド法学校であり，こうした法学校は徒弟制における師としても有名な実践者が法律事務所を構え，そこで弟子に教育を施したのが起こりである[35]。従って法学校における専門職養成は，徒弟制の一部として考えられていた。徒弟制の年限，すなわち法学校における修学年限は各地区の裁判所の規則によって異なるが，例えばニューヨークでは7年間，マサチューセッツでは5年間であった。同様にカレッジ卒業生の扱いも異なり，ニューヨークの場合はカレッジ卒業者の場合は7年の徒弟制年限を4年に短縮，マサチューセッツの場合はカレッジの卒業が必須となっていた[36]。

こうした要件からもわかる通り，法曹養成に関しても，この時期からカレッジ卒業生をその主な対象としていくようになったということがわかる。そして以下に述べるように，1800年頃にはイェールの卒業生の法曹が法律事務所を構え，そこでイェール卒業生に法学の実務教育を行うようになった。この動きはスタイルズの「大学計画」に沿うものであり，ドワイトとしてもカレッジ在学生向けの法学教授よりも，カレッジで法学を学ぶ基礎を身につけたうえでこれらの法学校に卒業生を送り込む方が有益であると判断した，とも推測できる。

4.2　イェール・カレッジと法学校の提携

イェール法学校の起源は，イェールを1797年に卒業した法曹であるセス・ステープルス（Seth P. Staples）の事務所で，1800年ごろから学生への法学教育を施したものが始まりであるとされている。

これはリッチフィールド法学校と同様の，法律事務所付属の法学校であり，その設立にイェール自体は関与していなかった。しかしながら，この法学校へ通う学生のほとんどがイェール・カレッジの卒業生であったことから，イェールは，ジェレミア・デイ学長期の1824年からこの法学校の学生をイェールの名簿に記録し始めるようになる。しかしこの当時はまだ名ばかりの提携であった[37]。

1826年になると，イェールはこの法学校の教員の一人である，イェール・カレッジを1783年に卒業したデイビッド・ダジェット（David Daggett）をイェールの法学教授として迎え入れることで，同法学校に対し資金の援助を行った。その結果1826年の時点で学生数わずか10名であった法学校は，1831年には44名の学生を有するに至った。そして1843年には，同法学校の卒業生に対してイェールがLL.B.の学位を授与するに至る[38]。

ここで注目したいのは，同法学校も，基本的にはカレッジ卒業生をその対象としていた，という点である。ここで授与された学位こそ博士（Doctor: LL.D./J.D.）ではなく学士（Bachelor: LL.B.）の学位ではあったが，法学の学士は，学士（B.A.）と同等のレベルのものでは無かった。中世以来のヨーロッパの学位制度では，取得時期が早い順に学士（A.B.），修士（A.M.），専門職学士，専門職博士の序列となっており，専門職に関する学士号は修士号よりも上位の扱いがなされていた[39]。ここで法学校卒業生に授与されたのがLL.B.であったのは，この名残であろう。

法学校（The Law School）のコース等に関する記述がイェールのカタログに登場するのも，本格的な提携が始まった1826年からであった。ここでは講師としてダジェットと弁護士のサミュエル・ヒッチコック（Samuel J. Hitchcock）の名前が挙がっており，「習慣法及び制定法の全ての章及び題目」（all the titles and subjects of the Common and Statute Law）に関する講義がダジェット法学教授より講義される旨が記されている。また，週1回の模擬法廷の開催や，学生間の討論等が行われるとされている[40]。

ここで注目したいのが，カタログの同箇所において，法学教授がカレッジの4年生向けに講義を行う旨が記されている点である。この点に関して，カタログにはどの講義をどの期間に行うかは記されていない。しかし1825–26年度より，イェール・カレッジでは政治経済（Political Economy）が4年生の第3学期に行われるようになっており[41]，ダジェットの法学教授契約開始の時期と重なることから，この科目を法学教授が担当したものと推測される。そしてこの政治経済をカレッジ課程に組み込むこと自体，法学校との提携を意識したものであったと推測できる。

5.　他カレッジのケースとの比較

5.1　イェールのケース

これまで見てきたとおり，神・法・医の各専門職養成は，19世紀前半のころまでは基本的にカレッジ卒業生をその主な対象としており，イェールの各専門職養成課程もこれと同等の入学者の基準を設定していた。

神学に関しては，ギリシャ語やヘブライ語といった聖書及び宗教文学の原典を読むために必須の古典語の習得をカレッジに任せ，神学校では実際の聖書の読解や説法の実習などのより実務的な訓練に焦点を充てた。また法学に関しても，法哲学的な基礎や政治経済に関する基礎知識をカレッジでの暗唱や講義に任せ，実際の法に関する実務的な知識を法学校において訓練するようになった。医学に関しても，原則的に医学書を読むために必須なラテン語や，医学講義の基礎となる自然哲学をカレッジで習得していることを前提として，その後の講義が展開された。

では，イェールにおいて専門職養成の課程が形成されてきた時期に，実際にどのような科目がカレッジで開講されていたのであろうか。1822年の年次カタログに掲載されている暗唱科目は，以下の通りである[42]。

第1学年　第1学期　ラテン語，ギリシャ語，算術，英文法
　　第2学期　ラテン語，ギリシャ語，代数学
　　第3学期　ギリシャ語，地理学，英文法
第2学年　第1学期　地理学，幾何学，ラテン語
　　第2学期　幾何学，ラテン語，数学
　　第3学期　ギリシャ語，数学，円錐曲線・球面幾何，修辞学，ラテン語
第3学年　第1学期　球面三角法，ギリシャ語，哲学，弁論
　　第2学期　ギリシャ語，哲学，弁論，ローマ帝国史
　　第3学期　天文学，歴史，以下選択：物理学，ギリシャ語，ヘブライ語
第4学年　第1学期　修辞学，論理学，政治哲学
　　第2学期　自然神学，精神哲学
　　第3学期　道徳哲学，キリスト教神学

1822–23年度は，以上の科目の教科書が暗唱用の教材として提示され，加えて下級生には英作文およびラテン語作文の指導，第3学年には自然哲学実験と英作文指導及び討論，第4学年には化学，鉱物学，自然哲学の各講義が設定されていた[43]。こうした教授課程の構成を見ると，第1学年において言語と数学の基礎的な部分を学んだ後に徐々に修辞学や地理学などのより発展した内容を学び，最終的に神学や政治哲学，自然哲学といった専門職養成に直結する内容に行き着くことがわかる。

この科目構成に基本的に変更は無いが，1825年になると，先に述べたように政治経済が第4学年の第3学期に導入される。これに伴って，第4学年の構成が以下のように変更となった[44]。

第4学年　第1学期　修辞学，論理学，自然神学，精神哲学，ギリシャ語・ラテン語
　　第2学期　道徳哲学，キリスト教神学，ギリシャ語・ラテン語
　　第3学期　政治経済

この年度以降，それまで3学期を通して行われていた各科目が2学期分に圧縮され，第3学期を丸々政治経済に費やすという科目構成がしばらく続く。これには，全米のカレッジの傾向として，卒業後法学関係に進む者の割合が大きく増加した点と関係してくるものと考えられる。

18世紀中葉ごろまで，各専門職養成へと進むカレッジ学生の割合は，神学が34%ほどであったのに対し，法学が13%, 医学が12%ほどであった。これが18世紀最後の25年間では神学が21%ほどであるのに対し法学が28%ほどになり，法学へと進む者の割合が神学へと進む者の割合を超えることとなる。以降神学は15%ほどで推移するのに対し，法学は28%ほどで推移していたことから，こうした状況を教授課程に反映させて，このような形になったものと考えられる[45]。

5.2　他のカレッジの動向

こうしたカレッジ課程の組み方は，必ずしもイェールのみに留まらず，多くのカレッジにおいて共通していたものと考えられる。例えばハーバードにおいても，19世紀前半においては，以下に示すように，法学校の発展と同時期に，社会科学系の科目の増強を図っている。例えばハーバードの1820年の科目は，ギリシャ語，ラテン語，数学，英文法，弁論，歴史，古代文化，修辞学，英作文，精神哲学，形而上学，自然哲学，神学，ヘブライ語，化学，道徳哲学，政治哲学，天文学，弁論・論題，精神哲学などから構成されていた[46]。

この頃から，「倫理学および政治学」として開学当初に教えられていた科目は19世紀初頭から「政治哲学」として最終学年において教えられるようになり，授業時間も1週間のうち2日にわたり1時間ずつであったものが午前の時間または午後の時間を用い週5日間にわたり教えられるようになった[47]。そして1825年には「政治経済」となり[48]，1830年には「政治経済及びアメリカ憲法」となった[49]。そして1833年には「政治経済」と「アメリカ憲法」はそれぞれ独立した科目となる[50]。このように，社会科学系の科目時間を増やし，科目の内容も次第に個別具体的になっていったという点から，当時のハーバードも，イェール同様，法学へと進む学生を意識した教授課程の変更がなされていたことが読み取れる。

このように，カレッジを専門職養成の基礎として捉え，各専門職養成学校が基礎として求めるような内容をカレッジ課程に組み込むという考え方は，当時ある程度共通した考え方であったと言え，こうした考え方はベンジャミン・ラッシュなどによる当時の学校整備構想にもあらわれている[51]。

おわりに

本稿では，18世紀後半から19世紀前半までのイェールにおける神・法・医の専門職養成課程設置の構想と，そこにおけるカレッジとの関係を追うことで，当時のカレッジ課程の目的を考察してきた。

本稿冒頭に示したこれまでの研究では，当時のカレッジはリーダーシップや人格の形成などといった，獲得した知識の利用よりも，「市民」育成のための人格への作用などの側面を重視していたとの解釈がなされていた。しかしながら当時のカレッジは同時に中世以来のヨーロッパに範を求めた大学化構想を展開しており，専門職養成との関係の中で，どのような知識を教授すべきかが考えられてきた。従って当時のカレッジは，必ずしも先に述べたような人格形成的な側面のみが重視されていたわけではなく，教授される知識そのものも，重要な役割を果たしていたといえる。

こうした本稿で示したアンテベラム期のカレッジ解釈は，アメリカ高等教育史におけるリベラル・エデュケイション解釈にも影響を与え得る。例えば，1828年に発表されたイェール報告の解釈も，こうした経緯を踏まえると，これまでの解釈に変更が生じる可能性がある。

このイェール報告は，「優れた教育の基礎を築く」（to LAY a FOUNDATION of a SUPERIOR EDUCATION）ことをカレッジ教育の目的としたうえで，カレッジにおける「知的活動」の効果として「精神の陶冶」（mental discipline）と「精神の装備」（mental furniture）を挙げ，前者が後者に優先されて鍛えられるべきとの理論を展開している[52]。これまでの解釈では，この精神の陶冶と装備の二項対立をそのまま形式陶冶と実質陶冶の二項対立に当てはめて解釈がなされ，後につながる知識の獲得よりも精神の諸力の拡張が優先されると解釈されてきた。しかしこのような歴史的経緯を踏まえると，カレッジにおいて獲得される知識そのものも「優れた教育の基礎」として重要視されてしかるべきである。この点に関して

は，今後の課題としてここに提示するに留める。

註

1) 以下本稿では，「専門職」という語を，中世以来大学において養成されてきた聖職者・法曹・医師の3専門職に限って用いる。
2) 例えばルーカスは，こうした解釈に基づき，「伝統的古典的教育の擁護に綿密な理由付けを行った」文書として1828年の「イェール報告」を評価している。またテリンは，キングス・カレッジの使命の「精神を拡張し，知性を向上させ，人間全体を完成させ，人生のすべての高尚な場面において最も輝かしい人格を養う資格を与える」という文言を挙げたうえで，「キリスト教的紳士」の育成がアンテベラム期のカレッジ設立者の求めるものであったとしている。Christopher J. Lucas, *American Higher Education: A History* (New York: St. Martin's Griffin, 1994), 132–34; John R. Thelin, *History of American Higher Education*, 2nd ed. (Baltimore: Johns Hopkins University Press, 2011), 24–27.
3) Roger L. Geiger, "The Ten Generations of American Higher Education," in *American Higher Education in the Twenty-First Century*, 3rd ed., Philip G Altbach, Patricia J. Gumport and Robert O. Berdahl ed. (Baltimore: Johns Hopkins University Press, 2011), 37–68.
4) Ibid.
5) Kenneth Nivison, "But a Step from College to the Judicial Bench": College and Curriculum in New England's "Age of Improvement"," *History of Education Quarterly* 50 no. 4 (2010): 460–87.
6) この一例として，イェール初代学長のトマス・クラップによるイェールの教授課程が挙げられる。クラップのカレッジ・カリキュラム論については，以下を参照のこと。原圭寛，「アンテベラム期のアメリカ高等教育史におけるイェール報告の位置：トマス・クラップのカレッジ・カリキュラム論との比較を通して」，『人間と社会の探求：慶應義塾大学社会学研究科紀要』no. 77 (2014): 39–53.
7) Ezra Stiles, "Plan of a University," in the letter to Eliphalet Williams, Dec. 3, 1777, in Ezra Stiles Papers (Group 2986, F-1), General Collection, Beinecke Rare Book and Manuscript Library, Yale University.
8) 尚，ドワイトについて詳しく言及している先行研究は，筆者管見の限りではカニングハムによる伝記のみである。ここではイェールの医学・神学コースの設置については，これに携わった教授たちの伝記的記述がなされており，ドワイト本人のイェール全体，ないしはカレッジに対する考え方についてはまとめられていない。Charles E. Cunningham, *Timothy Dwight 1752–1817: A Biography* (New York: MacMillan, 1942), chap. VII.
9) 以下のクラップに関する記述は，次の論文に拠る。原，「アンテベラム期のアメリカ高等教育史におけるイェール報告の位置」，39–53.
10) Stiles, "Plan of a University."
11) Ibid. この内容は，モーガンによるスタイルズの伝記においても紹介されている。Edmund S. Morgan, *The Great Puritan: A Life of Ezra Stiles 1727–1795* (Chapel Hill: The University of North Carolina Press, 1962), 321.
12)「大学計画」においてスタイルズは，法学教育の目的を"civilian"を育成することと定めているが，*Oxford English Dictionary*によれば，この時代に"civilian"という語は，「市民」を指す用法は無く，公法・市民法等の法律専門家を指していた。このスタイルズの法学教育観とカレッジ課程については，別稿を準備中である。
13) Brookes M. Kelley, *Yale: A History* (New Heaven, Yale University Press, 1974), 109.
14) Cunningham, *Dwight*, 192.
15) Ibid., 197ff; Kelley, *Yale*, 129ff.
16) Cunningham, *Dwight*, 201ff.
17) なお，カニングハムによれば，シリマンによる化学実験をニュー・ヘヴンの市民の啓蒙活動にも用いたとされている(Ibid., 210)。しかしこれはカレッジの正課ではなく，カレッジ外の市民に向けた公開講座的なものであった。
18) Ibid., 211; Kelley, *Yale*, 132.
19) Connecticut Medical Society, *Reprint of the Proceedings of the Connecticut Medical Society from 1792 to 1829 Inclusive* (Hartford, 1829), 77. 下線は原文のイタリック体を示す。

20) Cunningham, *Dwight*, 214.
21) Robert F. Seybolt, *Apprenticeship and Apprenticeship Education in Colonial New England and New York,* repr. ed. (1916; repr., New York: Arno Press, 1969), 1.
22) Flexner, *Medical Education in the United States and Canada*, 4–5; Martin Kaufman, *American Medical Education: The Formative Years, 1765–1910* (Westport: Greenwood Press, 1976), 18–27. 一般に，アメリカにおける医師をはじめとする専門職養成の規定の成立は，カーネギー教育振興財団（Carnegie Foundation of Advancement of Teaching）が主導した，いわゆる1910年のフレックスナー報告をはじめとする一連の専門職養成に関する報告書の出版以降であるとされてきた。しかし，医師養成制度化の始まった19世紀初頭の時点で，州レベルの規定ではあるものの，既にカレッジ教育をその前提とした規定が策定されており，実際に同報告においてもこの点は指摘されている。しかしこうした基準が維持されたのは19世紀中盤ごろまでであり，以降は人口増加や南北戦争に伴う医師不足のため，医師養成の基準が大幅に緩和され，カレッジ卒業生という要件は消滅することとなる。Kenneth M. Ludmerer, *Learning to Heal: The Development of American Medical Education,* Paperbacks edition (Baltimore: The Johns Hopkins University Press, 1996), 12–13; Flexner, *Medical Education in the United States and Canada*, 5–6; Martin Kaufman, *American Medical Education: The Formative Years, 1765–1910* (Westport: Greenwood Press, 1976), 36–40, 57.
23) *Catalogue of the Officers and Students in Yale College, November, 1825*, ([New Heaven,] 1825), 27.
24) *Catalogue of the Officers and Students in Yale College, November, 1826* ([New Heaven,] 1826), 30.
25) William G. Rothstein, *American Medical Schools and the Practice of Medicine: A History* (New York: Oxford University Press, 1987), 53–54
26) Cunningham, *Dwight*, 224–25.
27) Ibid., 228–29.
28) Ibid., 229–30.
29) Ibid., 230–31.
30) Natalie A. Naylor, "The Theological Seminary in the Configuration of American Higher Education: The Ante-Bellum Years," *History of Education Quarterly* 17 no. 1 (1977): 19.
31) Timothy Dwight, *A Sermon Preached at the Opening of the Theological Institution in Andover* (Boston, 1808), 3, 11.
32) Cunningham, *Dwight*, 232.
33) *Catalogue of the Officers and Students in Yale College, November, 1826* ([New Heaven,] 1826), 28.
34) Ibid., 193–95.
35) Robert Stevens, *Law School: Legal Education in America from the 1850's to the 1980's* (Union: The Lawbook Exchange, 2001), 3–4; Alfred Z. Reed, *Training for the Public Profession of the Law,* Bulletin Number Fifteen (New York: Carnegie Foundation for the Advancement of Teaching, 1921), 112–13; Lawrence M. Friedman, *A History of American Law*, 3rd ed. (New York: Simon and Schuster, 2005), 238–39.
36) Stevens, *Law School*, 4, 11; Reed, *Training for the Law*, 113.
37) Kelley, *Yale*, 200–1.
38) Ibid., 201.
39) 中世以来のヨーロッパの学位制度については，以下を参照のこと。別府昭郎，「中世大学における教師と学位」，『明治大学人文科学研究所紀要』no. 41 (1997): 297–313.
40) *Catalogue of the Officers and Students in Yale College, November, 1826* ([New Heaven,] 1826), 28–29.
41) *Catalogue of the Officers and Students in Yale College, November, 1825* ([New Heaven,] 1825), 23.
42) *Catalogue of the Officers and Students of Yale College, November, 1822* ([New Heaven,] 1822), 24. 尚，ここでは暗唱用の教科書のタイトルから科目名を提示しているため，数学と代数学など，カテゴリーのレベルが統一されていないものがある。
43) Ibid., 25.
44) *Catalogue of the Officers and Students in Yale College, November, 1825* ([New Heaven,] 1825), 23.
45) 卒業生の進路の割合については，以下を参考とした。Bailey B. Burritt, *Professional Distribution of College and*

University Graduates (Washington: Government Printing Office, 1912), 86 table 9, 143 table 68.

46) Harvard University, "Course of Instruction for Undergraduates in Harvard College, Oct. 1820, for the Ensuing Year," in *Catalogue of the Officers and Students of the University in Cambridge, 1820* by Harvard University (Cambridge: The University, 1820), 7–8.

47) Ibid.

48) Harvard University, *Catalogue of the Officers and Students of the University in Cambridge, 1825–26* (Cambridge: The University, 1825).

49) Harvard University, *Catalogue of the Officers and Students of the University in Cambridge, 1830–31* (Cambridge: The University, 1830).

50) Harvard University, *Catalogue of the Officers and Students of the University in Cambridge, 1833–34* (Cambridge: The University, 1833).

51) 例えばベンジャミン・ラッシュによって策定された1786年のフィラデルフィアでの計画では，以下のように述べられている「I.　首都に，州で唯一の大学を設置すること。法学，医学，神学，自然や社会に関する法則，経済などを，ヨーロッパの大学の風習に倣い，冬学期に公開授業で教えること。そして授業料を適切に設定するために，教授陣は州から給与の支払いを受けること。II.　4つのカレッジを設置すること。[中略]これらの大学では，若い人々に数学や高度な科学を，現在のアメリカのカレッジと同様の方法で教えること。学生がこれらのカレッジで学位を取得した後は，可能であれば，1～2学期の授業を大学で受けることで，彼らの学習を完成させること」(Benjamin Rush, *A Plan for the Establishment of Public Schools and the diffusion of Knowledge in Pennsylvania: to which are Added, Thoughts upon the Mode of Education, Proper in Republic* (Philadelphia: Thomas Dobson, 1786), cited in Charles S. Hyneman and Donald S. Luts, *American Political Writing during the Founding Ear 1760–1805,* vol. 1 (Indanapolis: Library Fund, 1983), 676–77)。更に，チャールズ・メーサー（Charles F. Mercer）は，1800年に行った自身の学校整備構想に関する演説において，以下のように述べている[51)]。「アカデミーに続くカレッジでは，アカデミーで既に行われたカリキュラムよりも上級のものを提供し，学生を学問的専門職の勉強へと適合させ，より上級の文理学（arts and sciences）を教える。全ての教育システムの頂点である大学では，カレッジでのカリキュラムを広げた講義を行い，若者を，彼らが立派に選んだ自由専門職の実践へと準備させる。また更に，どのような職業に就くかとは関係なく，人が学ぶことのできる，現存する知識の記述全てを教える能力を持っている」(Charles F. Mercer, *A Discourse on Popular Education Delivered in the Church at Princeton, the Evening before the Annual Commencement of the College of New Jersey* (Princeton: Princeton Press, 1826), 74)。前者はカレッジが学校段階論のなかで大学(university)との関連で以て語られた最初の例とされており，後者はThomas Jeffersonがバージニア州における学校制度改革案を作成する際に参照した資料であるとされている(Richard J. Storr, *The Beginnings of Graduate Education in America,* repr. ed. (1953; repr., New York: Arno Press and the New York Times, 1969), 7–11)[51)]。これらの計画や演説により，当時のカレッジは専門職養成への準備教育を行うための機関であると認識されていたことがわかる。

52) Committee of the Corporation and the Academical Faculty, *Reports on the Course of Instruction in Yale College* (New Heaven, 1828), 6.